

# 水田・里山放牧ニューズレター

第23号

2011年1月17日

発行 水田・里山放牧推進協議会

事務局 畜産草地研究所(那須研究拠点)

〒329-2793 那須塩原市千本松768

TEL 0287-37-7005 FAX 0287-37-7132



平成22年9月14日～15日、長野県下において水田・里山放牧推進協議会及び関東東海北陸農業試験研究推進会議畜産草地部会の現地研究会が開催されました。参加者は、農家を始め、農林水産省、民間、マスコミ、縣市町村関係団体及び畜草研など約90名が参加しました。

「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針」において、地域資源を活かした放牧活用が盛り込むべきポイントとして示され、放牧による自給飼料の利用拡大はますます重要となっています。そこで、近年、水田・里山や耕作放棄地等で広まりつつある「小規模移動放牧」について、現在までの到達点と残された問題点について、整理検討を目的に開催されました。

## I. 室内検討(1日目)

### 1. 畜産草地研究所の手島主任研究員

「小規模移動放牧技術(御代田研究拠点)の到達点」について話題提供がありました。言うまでもありませんが、小規模移動放牧の基本は、①20～30aの小区画の耕作放棄地等を区画毎に電気牧柵で囲い、放牧地とする、②小区画牧区を数カ所作り、この間を2～3頭の小頭数の牛群を移動させながら放牧することであり、①耕作放棄地が耕地の中に虫食い状態にあっても放牧利用できる、②区画を崩さず、撒収が簡単な電気牧柵を使用するので再耕地化が容易に出来る利点があります。

小規模移動放牧の到達点ですが、①耕作放棄地をそのまま利用する最初の段階(ステップ1)、②耕作放棄地に牧草の導入(ステップ2)、③牧草地と耕作放棄地の組み合わせによる放牧期間延長(ステップ3)へと段階的な技術進展の必要性が論じられました。また、小規模移動放牧による肥育素牛の育成や、開発した装備として、低床式家畜運搬車や不凍水槽が紹介されました。

### 2. 畜産草地研究所の宮路主任研究員

「小規模移動放牧の導入の効果と展開方向の検討」と題し、実践農家4戸の事例について、高年齢でも省力的な管理が行える点などが報告されました。A牧場は60歳代の夫婦で、繁殖雌牛17頭飼養、B牧場は80歳代の夫婦で、同9頭飼養、C牧場は60歳代の1.5人で、同13頭飼養、70歳代の夫婦で、同15頭の牧場です。

### 3. 富岡市の茂木氏(事例報告)

群馬県富岡市で遊休地放牧に取り組んでいる茂木さんから、「新規就農者による遊休地を活用した肉用牛繁殖経営」と題し、報告されました。内容は、牛飼いを始めた経緯、土地と牛の確保、放牧地のシバ型草地化、周辺への波及効果、今後の展望などで、現在の草地面積は 6ha で、シバ優占地やセンチピードグラス優占地、アズマネザサ優占地などがあります。退職後の新規就農でも分娩間隔 363 日を達成し、周辺にも波及しつつあることが報告されました。今後は、年間 12 頭出荷体制の確立、放牧地の景観の保持、地域住民の憩いの場所の提供、復活した農地の活用などを考えています。



事例報告する茂木さん

### 4. 小諸市の三井氏(事例報告)

小諸市で 11 年前から小規模移動放牧に取り組み、本技術の開発にも協力した三井さんから、「未利用遊休農地の放牧による活用」と題し、これまでの取り組みの経過や現在の状況について、報告がありました。三井さんは、長野県で最も早く「肉用繁殖牛の小規模移動放牧」に取り組んだ農家です。現在では、借地を含め3か所( 70 a、60 a、80a )で放牧を行っています。放牧繁殖牛は、最初 2 頭でしたが、現在は 6 頭に増えています。放牧は、5 月から 10 月まで行い、通年で屋外飼養を行っています。当初から親子放牧を行っていましたが、現在はパイプハウスに自作の親子分離ゲートを使って、子牛のみが補助飼料を摂取出来るようにしています。これは、入り口が 4 ページの写真のように低くしてあり、子牛だけが中へ入れるゲートです。遠い放牧地への移動は、JA職員の協力でトラックで移動しています。

冬季間も、70 aの放牧地で屋外飼養ですが、もう一つのパイプハウスを待避場として使います。これは、放牧地の中にある稲わらの保管場所でしたが、中に飼槽を置いて、単管パイプで柵を設け、給餌や種付けが出来るようにしました。親牛には、屋外に置いた飼槽で粗飼料や若干の配合飼料を与えています。

### 5. 畜産草地研究所の井出山地畜産研究チーム長(研究成果紹介)

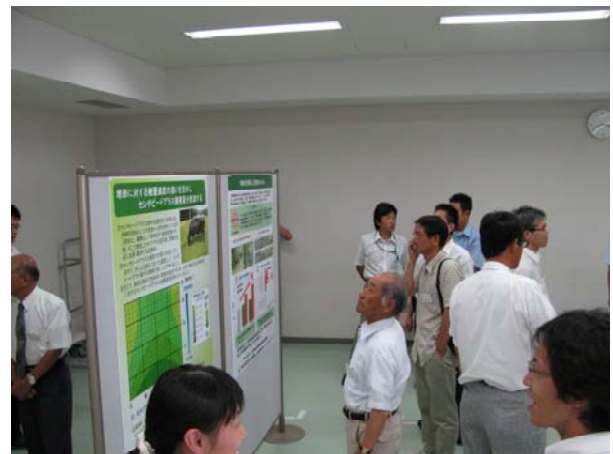
「牛で活かす山と里」と題して、御代田研究拠点の成果の紹介がありました。その中で、里を活かす放牧技術の開発として、多様な飼料資源を活用した周年放牧技術、小規模移動放牧による肥育素牛の育成、放牧後の牧草を用いた大豆のリビングマルチ栽培、小規模移動放牧における環境影響評価、放牧導入農家の経営評価などが報告されました。また、山を活かす放牧技術としては、施肥作業の簡素化、適切な転牧時期の予測、放牧地における繁殖管理の省力化、低コストで国産A3クラスの牛を増産する方法などが紹介されました。

## 6. 畜産草地研究所の山本放牧管理研究チーム長(研究成果紹介)

現在作成中の「プロジェクト研究(粗飼料多給による日本型家畜飼養技術の開発)成果マニュアル」について、紹介がありました。これは、プロジェクト研究を構成する「小規模移動放牧の省力化、汎用化のための技術開発」ユニットで取り組まれた研究成果の一つです。マニュアルのタイトルは「身近な草資源を放牧地としてもっと活用しよう」で、その目次は、①耕作放棄地に何を播けば何頭ぐらい放牧できるか(牧養力予測支援ソフトなど)、②放牧に向けた草種は何か(地域条件に合った草種、水田草地では耐湿性草種など)、③省力的なシバ草地にするには(シバの糞上移植法、センチピードグラスの導入法など)、④冬でも屋外で飼う方法は(水田と組み合わせたイネ立毛放牧、ヒコバエ放牧、水田裏イタリアンライグラス放牧など)、⑤安全に牛を飼うには(安全な牛の扱い方、放牧馴致法、家畜衛生対策など)、⑥放牧に必要な施設は(電気牧柵設置法、水場、スタンション設置法など)、から構成されています。



会場風景



会場に置かれたパネルを見る参加者

## II. 現地調査(2日目)

### 1. 小諸市の三井牧場

1日目に発表のあった三井牧場では、簡易なビニールハウス内で、親子分離して、子牛に補助飼料を給与し、10か月齢で300kg以上に順調に発育していました。放牧を開始して11年が経過し、牧草の被度が低下し、野草が多くなっており、今後どうしていくかが問題となっていました。



説明する三井さん(左)



三井さんの放牧地



パイプハウスの親子分離ゲート

## 2. 畜産草地研究所御代田研究拠点

御代田研究拠点では、小規模移動放牧用に開発された低床型家畜運搬車などが紹介されました。また、小規模移動放牧の試験地では、黒毛和種若齢牛の放牧育成試験などが紹介されました。



黒毛和種肥育素牛の放牧育成試験



低床型家畜運搬車

今回の情報交換会の様子は畜産コンサルタント10月号で取り上げられました。

これまでのニュースレターは水田里山放牧推進協議会のホームページ(<http://houboku.ac.affrc.go.jp/>)に掲載されています。

メールでの情報交換も可能ですので、質問・要望等ございましたら、以下にお寄せ下さい。

〒 329-2793

栃木県那須塩原市千本松768 畜産草地研究所那須研究拠点連絡調整チーム

FAX:0287-37-7132 e-mail : [kouryu\\_nasu@naro.affrc.go.jp](mailto:kouryu_nasu@naro.affrc.go.jp)